

蛇の中国文明論

— 『白蛇伝』の系譜 —

京都学園大学 川田耕

目的：蛇は豊かな意味性をもつ象徴である。近世の中国において蛇をめぐる物語には、民衆的な色合いを強めるなかで、父権的な社会・家族構造とイデオロギーとは裏腹に、秩序転覆的な情念と性愛的関係への憧憬が織り込まれていった。本論ではそこに、権力的秩序の相対化と人間の欲望の肯定といった中国的な近代性の展開を見いだす。

方法：蛇をめぐる様々なイメージと物語、なかでも四大伝説の一つとされる、宋代に生まれ変容していった『白蛇伝』の系譜を、社会的状況の変化と重ね合わせながら追いかけて分析し、近世中国の民衆の創造的な欲望の内実を明らかにする。

結果：古代世界にあって蛇は人類の様々な想像力を喚起してきたが、中心にあるのは人を誘惑し、騙し、命を脅かす、おぞましくも蠱惑的なイメージであった。古代中国では、蛇身の伏羲と女媧が人間創造の神とされたが、天ならびに皇帝を象徴する龍と分化して、蛇はもっぱら、男を誑かす得体の知れない女に化けて、生殖と死の不気味な象徴となった。近世に入り社会の国家化が進み都市民衆の層が厚くなるなかで、いわゆる『白蛇伝』が生み出される。白蛇の化身たる白娘子は、許宣という若く平凡な男を誑かし死にいたらしめようとするが、集権的な国家的・社会的秩序の象徴である法海禪師とその一党によって雷峰塔の下に鎮圧される。しかし、儒教的な権威的イデオロギーが空洞化していく明末以降清代にかけて何度も語り演じ直されるなかで、日本に渡った「蛇性の淫」等とは異なり、白蛇は次第に男を一途に想う人間的な一人の女となっていく。なかでも、法海との対決は一番の見せ場である「水闘」の段としてより劇的になり、道徳的で抑圧的な秩序を破壊しようとする、かつてなく激しい怒りの表現がみられる。この頃には白蛇は仙界から投胎されたものと理想化され、さらには状元となった息子との再会を待ちわびる等身大の母親の姿にすらなる。このようにして、国家的・男権的な秩序と性愛的な関係性とは対立したものとされるなかで、男女相互の欲望のありようが洗練され、より女性的で親密な新しい価値と感情の領域が生み出されていったと思われる。他方で国家的な力は矮小化されて、偉大な仏師であった法海は、前世では蝦蟇の精でその時の仕返しを白蛇にしようとしたただけだとまで貶められるにいたる。そこには、父権的な社会・家族構造とイデオロギーの裏側に育った、性愛と生命の流れへの民衆的で非言語的な創造の力がうかがわれる。もっとも、『白蛇伝』も蛇という象徴一般もその時にはすでに、かつての不気味な恐怖を喚起する力を失っていたが、それは性愛的な欲望の洗練と受容とともにあり、そこに中国文明の成熟がみられる。

結論：前近代の中国は表向きは変わることなく一貫して父権的な権威主義的体制を保っていたが、民衆的な想像力のなかではゆっくりと、しかし着実に、より性愛的で相互的な関係性への理解と受容が深まっていた。蛇をめぐるイメージと物語にあってそれはとりわけ、女性的・性愛的なものに対する恐怖から、そうしたものの人間化と理想化、さらには常識化の長いプロセスとして現れている。そこに、中国文明における人間的欲望の肯定と生活世界の分離・深化といった、ある種の近代性と結びつく、成熟を見いだすことができる。